今昔物語集と近代（上）――学術・小説・教科書

竹村信治

はじめに

近代における『今昔物語集』（以下、本集とも）の研究、享受、流通は、芳賀矢一による『攷證今昔物語集』の出版（天竺震旦部：大正二年1913、本朝部上：同三年1914、本朝部下：同一〇年1921）、芥川龍之介の登場（『羅生門』大正四年1915等）を軸に語られることが多い（西尾光一1984、渡辺匡一2003など）。まずはこの両者を取り上げるところからはじめよう。

一　芳賀矢一――日本文献学と『今昔物語集』

1　『今昔物語集』の再発見

芳賀矢一『攷證今昔物語集』は初の本集校訂本文を提供したこと、所収各話の出典・類話・同一説話を考証したことにおいて研究史上の劃期をなす（池田亀鑑1937）。さらに、「文学」としての価値を闡明に説いた点でも注目されている（西尾光一1984）。

> 今昔物語集三十一巻。国文で記した最旧最大の説話集として、優に世界文学の珍宝と見做すべきものである。…中略…印度及び支那の文明を鎔化した当時の社会を遺憾なく暴露して居るので、日本の文化史料としては真に恰好の資材であるのみならず、世界説話の系統を比較研究するもの等に取つては欠くべからざる至重至宝の書である。（「序文」1―2頁）
>
> 余はこゝに自ら惴らず、尚稿本のまゝ、此の書を刊行するに際して、ジヤータカやパンチヤタントラと同じく日本の古文学中に此の世界の珍宝あるを喜び、我が国唯一の古説話集として、かばかり彪然たる一大典籍の存在することに就いて、宇治亜相に感謝するの念を禁じ得ない。（「序文」29頁。なお、この「序文」について「文部省にて立ちながらに草された」との伝があったらしい。遠藤佐市郎1937。）

近世期、『今昔物語集』は『本朝遯史』（寛文四年1664）や『本朝語園』（宝永三年1706）、『山城名勝志』（正徳元年1711）など以来、伝記もしくは故事・逸話・奇談・怪談・霊験、地誌・由来等の取材源、あるいは林羅山『本朝通鑑』編集時の『国士舘日録』〈寛

文六年１６６６前後〉や近世随筆に見るように考証史料として扱われてきた（稲垣泰一１９９０・１９９２、加藤裕一郎１９９４、小峯和明２００１、渡辺麻里子２００３）。また、明治に入っても、「中等社会以下の、人情風俗を写したるもの」（三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』明治二三年１８９０）、「歴史的正確も存せず、個人的想像も見るべからず、しかもこの書の貴ぶべきは、当時の社会の風俗を見、公衆の思想を察するに、重大なる価値を存するを以てなり。」（藤岡作太郎『国文学全史』明治三八年１９０５）といった評価に終始する。そうしたなか、ここでは声高に「世界文学の珍宝」「世界説話の系統を比較研究するもの等に取つては欠くべからざる至重至宝の書」たる意義が言明されているのである。

このようにして大正二年１９１３に本集の意義をとく芳賀は、しかし明治三二年１８９９一二月刊の著述『国文学十講』（明治三一年１８９８八月一四日から二三日におよぶ帝国教育会夏期講習会講義「日本文学史」速記録の修訂）ではなお「この書によつて其時代の人の迷信、風俗などが分かります。」などと評していた。したがって再発見はそれ以後のことであって、これには明治三三年１９００九月から明治三五年１９０２八月に及ぶドイツ留学がかかわり、彼の地でドイツ文献学を学びドイツ浪漫派やグリム兄弟の民話伝説研究に接したことが影響しているかという（西尾光一１９８４）。帰朝後、東京帝国大学文科大学教授（国語学国文学第二講座）に任じた芳賀は、「芳賀博士講義題目（未定稿）」（『国語と国文学』１９３７．４）によれば、「国民伝説史」（明治三七年度）「日本国民伝説史」（明治三九年度）「日本文献学」（明治四〇年度）などを講じている。また、明治三六年１９０３には「国学とは何ぞや」と題する講演で旧来の国学とドイツ文献学とを比較し（國學院同窓会、『國學院雑誌』明治三七年１９０４一・二月号に載録）、同三八年１９０５六月には「地名伝説に就いて」（『史学雑誌』）を発表するなどしている。『攷證今昔物語集』出版にむけた準備もこれらと併行して進められていて、明治三六年１９０３春にはすでに底本書写終了後の本文校訂が石橋尚宝（『十訓抄詳解』明治三五年１９０２の著者）の手をかりて始められているのだから（「凡例一四」）、右の西尾の推定はその可能性が高い。

2　芳賀矢一と日本文献学

池田亀鑑は芳賀の『今昔物語集』研究を次のように位置づけている（池田亀鑑１９３７）。

博士は日本文献学に於て、国学の研究は学術的方法によらなければならない、学術的方法は、先づ正確なる原典の批判とその解釈から出発しなければならないとし、（『日本文献学』引用、略）と論じ、学術的研究はこの階段を飛躍してはならぬものとされてゐる。又博士は歴史的研究の必要を論ぜられ、判断は正確な事実を通したものでなければならないことを力説せられたが、これ等は今昔物語集の研究に於てそのまま実践されてゐる。即ち本文の制定、考勘は、その前者の主張を実行に移されたものであり、出典の考証、語句の索引はその後者を実行せられたものである。

ここでは引用を略した『日本文献学』は、明治四〇年度「日本文献学」の講義録で『芳賀矢一遺著　日本文献学／文法論／歴史物

語』（昭和三年１９２８）に収録されている。その講義の冒頭、芳賀は「余が、こゝに所謂『日本文献学』とは、Japanische Philologie の意味で、即ち国学のことである。」と述べている（1頁）。そして、近世期の「国学」を、

単に、歴史・有職・語学・文学等の雑然たる知識の集合にあらずして、とにかく、文献を通じ、之を根拠として、日本の真相を知る学問であることが知られるであらう。即ち、国学は、Nationale Wissenschaftである。（5―6頁）

と規定した上で、

徳川時代の研究の跡を継ぎ、而して、その誤れるを正し、その足らざるを補ひ、以て明治の新研究法によれる文献学を樹立しなければならぬ。国学者といふ名称は、やゝもすれば誤解があるから、今、改めて日本文献学者といひ、西洋の文献学者の方法に則らんとするのである。（7頁）

と宣言している。「西洋の文献学者」とはドイツ文献学の推進者である August Böckh（1785-1867）、Karl Wilhelm von Humboldt（1767-1835）、Gottfried Jakob Hermann（1772-1848）、Hermann Paul（1846-1921）たちのこと（明治三六年「国学とは何ぞや」にも彼らの紹介がある）。また、「誤れる」「足らざる」とは「徳川時代の国学者・古学者」の「独断的」「非科学的」「方法」のことで、芳賀はそれを五点にわたって指摘している（6―7頁。明治三六年「国学とは何ぞや」でも同様の指摘がある）。先の池田の発言はそのうちの第四「古代に偏して後代を打棄てゝゐること」をふまえたもので、芳賀にとっての『今昔物語集』の研究は日本文献学研究の一環としてあり、「学術的方法（研究）」「歴史的研究」にわたる「国学」の欠を補うために実践されたというのである。『攷證今昔物語集』は天竺震旦部についても校訂本文を提供し考証を試みている。これも岡本保孝『今昔物語出典攷』（安永七年１７７８序）の継承という以上に、「誤れる」「足らざる」点の第一として挙げられている「その動機から来た誤謬で、一意、儒仏の影響を避けようとしたところから、勢、牽強付会に流れた傾向」を補正する日本文献学研究実践の企図に出たものだった（高木市之助、１９３７）。

3　近代日本と文献学との出会い

池田亀鑑は先の文章の中で次のようにも述べている（池田亀鑑１９３７）。

博士は、源氏物語や歴史物語の研究に於て、平安時代の社会と、その時代の精神とを明かにせられたが、それは貴族的社会に限られたものであつた。博士は更に進んで、平安時代の民衆の社会と、その精神とを明かにせんがために、この尨大なる説話文学集を資料として選ばれたもののやうに察せられる。何となれば、博士の文献学は、ここに到達しなければ完成とは云はれないからである。この点から視ると、攷證今昔物語集は、博士の研究体系の上の、一つの過程にすぎないのである。

これらの証言によれば、従来の指摘どおり、『今昔物語集』はドイツ文献学の参照をもって「国学」を「日本文献学」へと更新していこうとする芳賀の構想において、あらたな位置づけを獲得したといえそうだ。

ただし、正確を期すために瑣事にこだわれば、芳賀自身のドイツ文献学との出会いは留学以前のことであったらしい。というのも、留学直前の明治三三年１９００一一月に刊行された『国学史概説』にすでに「フイロロギー」への言及がみとめられるからである（末段）。「徳川時代の国学者・古学者」の「独断的」「非科学的」「方法」と同趣旨の「昔の国学者の欠点」に関する指摘もみえていて、「国学」を「日本文献学」へと更新していこうとする芳賀の構想は留学以前のこととしなければならない。また、上田万年は彼自身の留学（明治二三年１８９０～明治二七年１８９４）前の明治二二年１８８９九月に『おほかみ〈独逸　グリム氏原著／日本　上田万年重訳〉』（吉川書店）を出版しているが（グリム童話の本邦初訳は１８８７年（明治二〇年１８８７）に出た桐南居士〈菅了法〉抄訳『西洋故事神仙叢話』。また、上田万年「『お伽花籠』序文」によれば呉文聡『（西洋昔話第一）八ツ山羊』明治二七年１８９４、弘文社などもあった。久松潜一１９６８）、留学後の明治二八年１８９５には芳賀らとともに『帝国文学』（一〇月号）に次のような「俗謡」蒐集「広告」を出している（Johann Gottfried Herder〈1744-1803〉『民謡集』〈1778-79〉の影響であろう。なお、同誌明治三〇年六月号「雑報」には「文体の簡潔と俗謡の研究」、明治三一年四月号「雑報」には「俚諺の蒐集と其研究」と題する記事がある）。

生等研究上広く我が全国の俗謡を蒐集仕度候間篤志の諸君はなにとぞ御地の俗謡を古今を択ばず新旧に関せず現在謡はるゝと否とを問はず御聞知の限り左の三名の中に御寄送被下度候尚相叶ふべくは其の作者其の流行時代或はそを謡ふ場合等をも御記入被下度此段広く全国の篤志諸君に懇願仕候／本郷区向岡弥生町三番地　上田万年／牛込区東五軒町十九番地　芳賀矢一／小石川区原町十二番地　鹽井正男

同誌同月号には『日本昔噺第十三編〈漣山人著／博文館発行〉』の広告もあって、そこには「（上略）予輩さきにメールヘンの棄つべからざるを説きしが今日の文壇、之を嘱望するに足るべきものは、独り漣山人あるを見る、山人たる者、啻に滑稽軽妙に止まらずして、時に幽怪魂奇なる題目を捉へ来るべき也。」との評が付されている。これらに明治三〇年前後に沸騰する比較神話学、比較説話学、比較文学を加えれば（小峯和明２００１、『帝国文学』明治三〇年前後の「雑報」参照）、ドイツ文献学にかかわる俗謡・俚諺・昔話・伝説・神話・説話研究はずいぶんと早くから紹介され、日本での蒐集もすでに行われていたことがわかる。「文学史攻究法研究」のためという芳賀のドイツ留学も（上田の留学は「博言学」＝〝ことばの学問〟でこれは英語 philology の日本語訳。芳賀『国学とは何ぞや』参照）、こうした情況のなかで「学術的方法（研究）」「歴史的研究」にわたる「国学」の欠を補うのを目的としたというべく、彼の地での直接の文献学研究実践との出会いが『今昔物語集』の再発見を導いたということであろう（留学以前の芳賀と文献学との接点の一つには先にドイツに留学した上田万年との交遊関係もあったと考えられる。上田万年１９３７。なお、留学以前の芳賀の著述『国学史概論』にはドイツ文献学者やその所説の紹介がなく、留学後の『国学とは何ぞや』『日本文献学』では詳細な彼の地の文献学紹介があり、古典文献学から国民文献学への史的展開についても言及がある）。

4　近代日本の国民国家形成プロジェクトと『今昔物語集』

「世界文学の珍宝」――、芳賀による本集の再定位はこのようにしてなった。しかしその「文学」は我々の所謂「文学」ではなく（芳賀『国文学読本』〈明治二三年１８８９四月、上田万年校閲〉の「緒論」には「文学とは階級の如何を問はず、専門の如何に関らず、凡て人とし人たらん者に普通なる知識と、普通なる感情に訴へて多少の興味を有するもの是なり」「乃ち知る、普通は文学の本質にして、文学は人間の射映（リフレクス）なることを。」とある）、見たとおり日本文献学（「文献を通じ、之を根拠として、日本の真相を知る学問」）資料としての「文学」である。以後、芳賀のもとで学んだ坂井衡平が大正四年１９１５に卒業論文を提出、大正一二年１９２３には『今昔物語集の新研究』としてこれを上梓するが、それは芳賀の目論見であった『今昔物語集』の文献学的研究を全面的に展開したものであった。また、精度の点で格段の進展をしめす片寄正義の仕事（『今昔物語集の研究（上）』１９４３、『今昔物語集論』１９４４、『今昔物語集の研究（下）』１９４５成稿、１９７４刊）も、『今昔物語集の研究（上）』に寄せられた山岸徳平の「序」や同書「序説」に明らかなように日本文献学の問題構制のもとで行われている。近代における『今昔物語集』研究はたしかに芳賀による再発見、つまりは日本文献学資料としての再定位を端緒としているのである。

かくして『今昔物語集』は日本文献学に媒介されて近代に再生を果たしたかのごとくである。けれども、その再生の意味は深長である。ドイツ（ゲルマン）文献学は、その開拓者グリム兄弟の活動によっても知られているとおり、民族的・民衆的なものを強く志向するロマン主義の流れのなか、ギリシャ・ローマへの帰一、同一化をめざす古典文献学（古典古代学）と袂を分かつかたちで提唱された民族主義的な国民文献学として誕生した（芳賀『国学とは何ぞや』）。この国民文献学（ドイツ文献学・イギリス文献学・フランス文献学……）は、西欧各国においては国民国家の形成過程にふかく関与している。我が国におけるドイツ文献学移入もこのことと無関係ではない。明治の開明新時代にふさわしい「科学的方法」「学術的方法（研究）」「歴史的研究」として学術界に移入されたそれは、「日本文献学」と称して「国学」との差異化を図ろうとした芳賀の警戒にもかかわらず、日清・日露戦役や第一次世界大戦を通じた民族意識の昂揚におされるかたちでやがて新「国学」化し（それは芳賀自身の変容とともにあったことだが今は立ち入らない）、国民国家観を下支えする言説編制へと編み込まれていく。そしてその間、文献学を「方法」として受容した研究者に「国民」（民族）の同質性や一体感を幻想させこれを追究させ、彼らと彼らに連なる人々の内にナショナリズム、愛国心を醸成、強化していった。すなわち民族主義的な国民国家観の流通、浸透をになうメディアの一つとなったのである。その意味で、ドイツ文献学（国民文献学）との出会いをもってなった『今昔物語集』の再発見、再定位とは、出会い＝組み込みによる本集の国民文献学資料（「日本の真相を知る学問」の「根拠」となる「文献」）化であったと同時に、それにとどまらない、民族主義的な国民国家観の流通、浸透をになう（天竺震旦部への関心をも考慮すれば〝アジヤ〟民族観の培養をもになう）メディアとしての役割をやがて本集に課していく行為であったと評すべきであろう（芳賀『国学とは何ぞや』には「東洋

の文献学」「亜細亜の文献学」の文言が見える）。それは、いくぶん大袈裟な物言いにはなるが、近代日本の国民国家形成プロジェクトにかかわる出来事でもあったのである。

二　芥川龍之介――近代小説界と『今昔物語集』

1　芥川龍之介と『今昔物語集』

近代における『今昔物語集』の研究、享受、流通は、今一人、芥川龍之介を主役として語られる。しかし、これについては贅言を要しまい。『羅生門』（『今昔物語集』巻二九―18、大正四年1915）『鼻』（同二八―20、同四年）『芋粥』（同二六―17、同五年1916）『運』（同一六―33、同六年1917）『偸盗』（同二九―3、同六年）『往生絵巻』（同一九―14、同一〇年1921）『好色』（同三〇―1、同一〇年）『藪の中』（同二九―23、同一一年1922）『六の宮の姫君』（同一九―5、同一一年）『尼提』（同三―21、同一四年1925）、そして自死の年には「今昔物語鑑賞」（『新潮社・日本文学講座』第6巻、昭和二年1927）を草して本集の「生まゝゝしさ」「brutality（野生）の美しさ」「Human Comedy（人間喜劇）」「作者の写生的筆致」を称揚、これが以後、本集の「文学」をかたる際のキーワードともなっていく。

芥川の死の三ヶ月前、斎藤清衛は「現代作家の中で説話文学的のものを書いて成功した芥川氏」と評し（斎藤1927）、島津久基も昭和一一年1936刊『新潮社・日本文学大辞典』の「説話文学」項（第四巻）の末尾に「明治以降では、大正期の小説家芥川龍之介を、好んで『今昔』『宇治拾遺』の類に題材を求めた異色ある作家として特記して置きたい」と付言する。さらに「『今昔物語』に高い文学的価値を与えた最初の具眼者は、芥川龍之介であった」と評した小島政二郎は、

> 彼が『今昔物語』に高い文学的価値を発見したということは、我国の文学史上において非常な功績だったと言わなければならない。『今昔物語』誕生以来九百年を隔てて初めて聞いた称讃の辞であり、初めて与えられた正しい価値判断である。芥川龍之介以後『平安朝文学史』は書き改められるであろう。

とその意義を説いている（小島1940）。日本近代の「小説」界は坪内逍遙『小説神髄』（明治一八年1885～明治一九年1886）の「小説」論の影響下、戯作をすてて人情及び世態・風俗の模写、すなわち写実主義に進む。その写実主義は描写（不可視の人情の、心理学に即した視覚化）に力点をおいたもので、そこでは説話にかかわる「奇異譚」が「羅マンス」＝「荒唐無稽」として低位におかれ、打ち棄てられていった。小島の芥川称賛は明治期のそうした「小説」をめぐる言説状況における説話や『今昔物語集』の扱いを念頭においてのことであろうが、これを含めた如上の発言は、同時代人の芥川像における『今昔物語集』や説話の位置を伝え、また彼らの認めた（『今昔物語集』および説話文学にとっての）芥川の意義をよく教えている。

2　逍遙「小説」論周辺の声

もっとも、本集に取材した芥川作品とその受容の意義を近代日本小説史を席巻した坪内逍遙「小説」論との関係をもってのみ語るこ

とは一面的なのかもしれない。芥川は明治二五年１８９２三月の誕生だがその五歳の年、明治三〇年１８９７の『帝国文学』五月号「雑報」欄には次のような論評が見える。

活ける人情の極微を穿ち、活ける社会の実況を写し、読者をして現代の小パノラマ中に彷徨せしめ、津々たる趣味を味わひ、満腔の同情を催さしむるもの是実に世話的小説の特長なり。而して人は其哲学的思想進歩するに従ひ、荒唐無稽の談話を厭ひ、飽く迄精緻写実の物語に耳を籍さんとするの傾向あるは、今更いふを須ゐず。是即ち今日世話的小説の独り小説界を専領して、歴史小説はあれどもなきが如き状況を呈したる所以なるか。然れども此過大なる偏重は果して文学界の自然に然らしむる現象なるか、歴史小説は果して然かく無趣味無価値のものなる歟、勿論如何なる評家若くは作家と雖も、未だ曾て此の如き断言を公にはなしたる者なからむ。然れども事実は確かに方今の小説界が如此偏見を抱ける事を証しつゝあるなり。見よ熱心誠実を以て歴史小説の著述に筆を染むるの作家今果して幾人かある。はた熱心誠実を以て之が批評称道に労を惜まざるの評家果して幾人かある。（…下略…）

「荒唐無稽の談話（訓みは「ものがたり」か）」とは説話のことだろう。明治三〇年における逍遙「小説」論の浸透ぶり窺わせるこの記事の趣旨は、しかしそうした「其哲学的思想進歩するに従ひ、荒唐無稽の談話を厭ひ、飽く迄精緻写実の物語に耳を籍さんとするの傾向」、「今日世話的小説の独り小説界を専領して、歴史小説はあれどもなきが如き状況」をこそ嘆き問題化しようとするところにある。

右の引用には「歴史小説の不振」と小題が付されているが、同じ小題の論評は同誌明治三一年七月号「雑報」欄にも見える。そこでは冒頭に、

明治文学の尤も顕著なる現象は夫れ歴史小説の不振なる乎。（…中略…）而して未だ一人の歴史小説を以て生命となすものなく、僅かに学海、桜痴、露伴等数作家の手によりて微々たる痕跡を印せられしに過ぎず、而して是等寥々たる諸篇と雖とも善く一代の好尚を動かし、後世に伝唱して、明治文学の産物と誇らるべきものにあらず。

との慨嘆を記した後、衰退軌を一にする「英国文界」と比較しつつその原因をさぐり（「不振の源因」）、つづく「歴史小説作家」項において、

余輩が歴史小説の不振に就きて感ずる所大抵以上の如し。之を挽回して再びその盛観に接せしめんは到底是れ不振の諸根源を圧倒して余裕あるべき偉人にあらずんば決して望むべきにあらず。換言すれば少くとも曲亭馬琴が大想像力と大筆力とに加ふるに一層精確なる歴史的地理的の知識を具有し、且つ何等の偏狭なる主義に拘束せられざる偉人によりてのみ成就さるべき事業なりとす。且つ夫れ我現時の文界は尚ほ心理的研究の歩を進めずと雖ど、世界の趨向は次第に之に及ばんとすれば今後の歴史小説は従来のものとは大に其性質を異にし妖怪的偉人魔物的勇者の如きは自ら除去せらるべき種類のものたらん。思ふに心理的小説と歴史的小説とは今後決して相反馳すべき性質のものにあらずして却て相随伴し相補成して発達すべきものなるべし。

との見解が述べられる。『帝国文学』誌「雑報」欄にはこのほか、

・思ふに今日の文士に尤も欠けたる処は、思を構ふる事の甚だ足らざるにあり。僅かに一二の文士を外にしては、其の作に於て人生観を見る事なく、倫理的思想を見る事なし。（明治三〇年五月号）

・我文界に於て最も顕著なる現象の一は其単調なることなり。（…中略…）今の読者社会は含蓄なき事象の描写に倦厭せる也。（明治三一年一月号）

・而して今の作家が材料を求むる所を察すれば、主として外界に求め、其の観察を以て唯一の源泉となすものあるに似たり。（…中略…）由来現今作家が含蓄なき事象の描写を事とするあるは其材料を求むるに思索と空想とを欠陥するに由る。されば余輩は外界に材料を求むること愈々深く且つ広からむことを望むと同時に、更に思念を内界、空想界に凝してよく之を融合諧和せしめ、以て見時の欠陥を補充し、更に深遠なる意義を加ふるものあらむことを望んで已まず。（明治三一年一二月号）

など、逍遙「小説」論の周辺で発せられた声が記し留められている。先の「歴史小説」をめぐる論評はこうしたさまざまな声の一つとしてある。

3　芥川龍之介の登場――場の風景

大正元年１９１２の「興津弥五右衛門の遺書」以来、歴史小説を続々と発表する森鷗外が「歴史其儘と歴史離れ」を草するのは大正四年１９１５一月（『心の花』）。右に見たのはそれ以前の「歴史小説」論である。「歴史離れ」を「歴史上の素材に束縛されずに、作者の主観的、空想的フィクションを駆使する方法」（長谷川泉１９７９）ということができるならば、そうした「歴史小説」を含む小説への要求（「思念を内界、空想界に凝してよく之を融合諧和せしめ、以て見時の欠陥を補充し、更に深遠なる意義を加ふるもの」）はすでに明治三〇年前後に発しはじめられていたことになろう。鷗外はこうした声のなかで歴史小説を書き始め、「鷗外が歴史小説に盛った主題をさらに濃厚にかつ明快にしたのが芥川龍之介・菊池寛の歴史小説である」（長谷川泉１９７９）。

また、芥川の『鼻』に「あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます」（大正五年二月一九日付書簡）との激励をよせた夏目漱石は『帝国文学』の当初からの会員でもあった。漱石の耳にも明治三〇年前後の「小説」論は入っていたことであろう。加えて、漱石「創作家の態度」（『ホトトギス』11―7、明治四一年１９０８四月）には、「客観文学」（「叙述すべき事相に自己の評価を与へて優劣の差別をつけない」）と「情操文学」（「進んで善、美、壮を叙して之に対する情操を維持しもしくは助長する」）とについて述べ、「今日の文学」に必要な「客観的態度」による「研究」として、①「性格の描写」（＝「客観的に性格の全局面を描出」）、②「心理状態の解剖」（＝複雑になりつゝある吾々の心のうちをよく観察」）、③「人生の局部を描写して、之を一句にまとめ得る様な意味を与へる事」（＝「綜合」）、④「人生に於て、容易に注意を払つて置かなかつた現象」の四点を挙げているが、これらには明治三〇年前後の「小説」論との重なりが認められ、また多くは芥川の諸作品にもよく当てはまる。

芥川は「中学時代には、泉鏡花のものに没頭し（…中略…）続いて夏目さんのもの、森さんのものも大抵皆よんでゐる」（「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」大正八年１９１９）と語る。この発言は鷗外・漱石にというばかりでなく、彼らを介して明治三〇年前後の「歴史的小説」論また「小説」論にもつらなった芥川を考えさせる（『ひょっとこ』〈大正四年四月〉『羅生門』〈同一一月〉が『帝国文学』誌に掲載されている点から妄想をふくらませば『帝国文学』記事との直接の接触をうかがってよいのかもしれない）。逍遙「小説」論を軸に「小説」をめぐるさまざまな声が発せられるなか、泉鏡花に親しみ怪談・妖怪譚を好み『聊斎志異』を繙く少年時代を送った芥川は、「心理的小説と歴史的小説とは今後決して相反馳すべき性質のものにあらずして却て相随伴し相補成して発達すべきものなるべし」の声の残響などにもとりまかれながら『今昔物語集』に取材しその再生をはたしたということであろう。

とまれ、かくして『今昔物語集』は近代小説界に芥川とともに登場し、再認される。以後、具眼者の発見に触発された大正・昭和の作家たちはこぞって本集を読み、これに材を取った作品を陸続と発表する。その具体は藤本徳明の考証（「近代文学と『今昔物語』」１９７９）に詳しいので省略に従うが、『今昔物語集』はこうして「小説」論の季節に「小説」というメディアを介して近代に再発見され、流布流通していく。そこでは新たな『今昔物語集』像が近代作家たちの「小説」観、「文学」観に見合う形で形成され、それが彼らの作品や評論をとおして読者に浸透、定着、作用していくといった事態も生じている。

＊

ともに昭和二年１９２７に逝った芳賀矢一（二月二六日）、芥川龍之介（七月二四日）の仕事とその影響を軸として語られる近代の『今昔物語集』享受、流通の物語とは以上のようなことだが、さらに「説話」「説話文学」にも注意をはらい、別のメディア環境を視野におさめれば、この享受・流通の物語は今少し詳しく語ることができそうである。たとえば、昭和八年１９３３から昭和一三年１９３８にわたって刊行された第四次国定教科書「小学国語読本（サクラ読本）」、また佐治繁一「分類法上の説話文学」（昭和一〇年１９３５一〇月六日第3回図書館学講演会要旨、１９３５）はその端的な事例である。

前者について秋田喜三郎は、この読本の「編纂機構」が各巻「韻文」「生活文」「説話文」の三部構成となっている点に特色を指摘し、「説話文」が

「童話・寓話」（巻一・二の興味本位のもの）
「伝説・神話」（巻三・四・五の国民性及び国体観念に関するもの）
「史話（前期）」（巻六・七の歴史物語に関するもの）
「史話（中期）」（巻八・九の歴史文学に関するもの）
「史話（後期）」（巻十・十一・十二の国民説話及び文化史に関するもの）

として「種別およびその発展」への配慮をもって編制されているところに、「整然たる説話体系」を見出だしている（秋田１９３８）。本集話は巻七第4課「わざくらべ」（巻二四5「百済川成、飛騨工挑語」、趣意書「出所、今昔物語」）、巻九第23課「袴垂」（巻二七5「藤原保昌朝臣、値盗人袴垂語」、趣意書「原拠は今昔物語及び宇治拾遺物語」）の二教材に見える。ここでは『今昔物語集』は広範な「説話文」教材の一

部をなすにすぎないが、他方、学術語彙「説話」の国語教育界への浸透、そこでの用法拡張の実際を伝えてもいる。

佐治繁一「分類法上の説話文学」の冒頭には次のようにある。

近来我国ニ於ケル民俗学研究ノ興隆ニ伴ッテ、神話伝説口碑民話等所謂説話文学ノ作品ガ陸続トシテ刊行サレマス事ハ、諸君モ既ニ御存知ノ事ト思ヒマス。従ッテ斯様ニ同種同形式ノ文献ガ、相当多数ニ出版サレマスレバ、私共ハ当然、コレラヲ図書分類上如何ニ処理スベキカトイフ問題ニ逢着スルノデアリマス。在来ノ神話ハ宗教ニ、童話ハ文学ニ、伝説民話ハ風俗ニトイフ様ナ、夫々ノ説話ヲ分散シテ配置スベキヤ、ハタ又茲ニ「説話文学」トイフ、一ツノ新シイ綜合的文学形式ニ、何等カノ考慮ヲ廻スノ要ナキヤ？私ノ今日ノ講演ノ主旨ハ、実ニ茲ニ存スルワケデアリマス。

以下、「説話」と「説話文学」の概念規定に関する先行研究を周到に検討し（この期としては出色の考察であって今後の説話および説話文学の研究史記述においては必見のものとなろう）、「物語」との差異にもふれて、「トマレ斯ノ如ク、最近ノ国文学史上ニ「説話文学」トイフ一新形式ガ生レ出デ、コレニ関スル文献ガ続刊サレマス事ハ厳然タル事実ナノデアリマス、私共ハコノ現実ニ対シ、果シテ従前ノ既成国文学分類ニ、イツマデモ満足スベキデアリマセウヤ。図書ノ分類ハ科学ノ進展ト共ニ、常ニ伸ブベキモノ……諸君ノ御一考ヲ煩ハシテ、分類法上ノ説話文学ノ落チツク先ヲ切望シテ止ミマセン」と結んでいる。

かくして、芳賀・芥川歿後の昭和戦前期には、『今昔物語集』が「説話」及び「説話文学」の範疇にとりこまれ、流通メディアが図書館をも含めたそれへと拡大し、両者のかかわりはより複雑な様相を呈していく。もちろん、そこでも新「国学」（＝「国文学」）化した日本文献学は強く作用し、また、高木武『大日本読本　新制第二版』（昭和一〇年）第8巻に『今昔物語集』巻二六　17「利仁将軍若時、従京敦賀将行五位語」が「芋粥」と題して採録されるなど、芥川の影も確実に広がっている。

ただし、ここまで辿ってきた芳賀矢一、芥川龍之介の仕事とその影響を軸とした近代の『今昔物語集』享受・流通の物語は、芥川以前、芳賀の留学以前の教科書教材を点検していくと、いささかの改訂の必要を感じさせるものでもある。すなわち芳賀留学の明治三三年１９００以前の中学校教科書にはすでに三六話におよぶ『今昔物語集』話が採録されていて、相応の享受・流通を果たしていたことが確かめられるのである。芳賀自身も明治二三年１８９０、帝大在学中に刊行した『国文学読本』に本集話を加えているし（しかも『考訂今昔物語』に依拠しない形で）、明治二九年１８９６四月に第一高等学校国文学科（代表高津鍬三郎）が編纂した『高等国文』の第三巻は『宇治拾遺物語』（全一四話、話番号は万治版本のそれではなく通し番号が記されている）『十訓抄』（全一六話）『古今著聞集』（全六話）『今昔物語集』（全八話）からなるが、当時芳賀は教授として在職しているので（明治二八年三月～同三二年一月）その編纂に加わった可能性が高く、留学以前から『今昔物語集』には十分な関心が寄せられていたと推される。

こうしてみると、『今昔物語集』は明治三三年以前の中学校で多

く学ばれ、先に見た三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』（明治二三年１８９０）、藤岡作太郎『国文学全史』（明治三八年１９０５）、『国文学十講』（明治三二年１８９９一二月）における評価とは別に、相応の位置をすでに占めていたことがわかる。とすれば、芥川『羅生門』『鼻』等が大正四年１９１５七、八月刊行の『校注国文叢書』巻一六、一七（池辺義象編、博文館刊）の頭注を参考にしていることから、これを芥川が「しじゅう手元において愛用した『今昔物語集』のテキスト」（長野嘗一１９６７、宮本瑞夫１９８５）「芥川が読んだ本」（岩波版『芥川龍之介全集』第一巻「注解」１９９５）とするのが一般だが、明治二五年１８９２誕生の芥川に（中学校進学は明治三八年１９０５）それ以前の『今昔物語集』体験がなかったかどうか、一考の余地はあろう。以下、主として教科書、とくに中学校（明治一九年１８８６四月以降「国語及漢文」、昭和六年１９３１一月以降「国語漢文」）のそれに注目してみたい。（以下、続稿。なお、竹村２００８、参照）

【注】

秋田喜三郎『（読方教育体系第六巻）読本の体系的研究』、１９３８、晃文社。

池田亀鑑「芳賀博士と中古文学研究」、『国語と国文学』14―４（特輯「芳賀博士と明治大正の国文学」）、１９３７。

稲垣泰一編『考訂今昔物語　後編』、１９９０、新典社。

稲垣泰一「『今昔物語集』の流布と享受 ―室町時代から江戸中期まで―」、『文芸言語研究・文芸篇』22、１９９２。

上田万年「芳賀君の思出」、『国語と国文学』14―４（特輯「芳賀博士と明治大正の国文学」）、１９３７。

遠藤佐市郎「芳賀先生の思出」、『国語と国文学』14―４（特輯「芳賀博士と明治大正の国文学」）、１９３７。

大岡保三「思出二つ」、『国語と国文学』14―４（特輯「芳賀博士と明治大正の国文学」）、１９３７。

加藤裕一郎「林鵞峰と今昔物語集 ―国士舘日録を通して―」、今昔の会・口頭発表、１９９４．３。

小島政次郎「今昔物語」、『わが古典鑑賞』、１９４０。筑摩叢書１９６４。

小峯和明「説話の輪郭」、『文学』１―４、２０００、岩波書店。

小峯和明「説話学の階梯 ― 近世随筆から南方熊楠へ」、『国文学・解釈と教材の研究』46―10、２００１．８。

斎藤清衛「説話文学の本質」、『国語と国文学』４―４、１９２７。

佐治繁一「分類法上の説話文学」、『図書館研究』Ⅷ―４、１９３５、青年図書館員聯盟。

高木市之助「芳賀博士の学風」、『国語と国文学』14―４、１９３７。

竹村信治「今昔物語集と近代メディア ― メディアとして芥川龍之介」、『今昔物語集を読む』２００８、吉川弘文館。

塚田晃信「『今昔物語集』の近世における受容の一端」、『東洋大学短期大学紀要』14、１９８３。

長野嘗一『古典と近代作家 ―芥川龍之介』、１９６７、有朋堂、等。

西尾光一「今昔物語研究史 ―目録・その評価と解説―」、『国文学解釈と鑑賞』49―11、１９８４、至文堂。

長谷川泉「歴史小説」、『国文学・解釈と鑑賞臨時増刊号（四訂増補版）文芸用語の基礎知識』１９８５。『同（増補改訂版）』１９７９、同。
久松潜一「解題」（上田万年「おほかみ」、芳賀矢一「国学史概論」「国学と何ぞや」）、明治文学全集44、１９６８、筑摩書房。
藤本徳明「近代文学と『今昔物語』」、『図説日本の古典　６今昔物語』、１９７９、小学館、等。
宮本瑞夫「宮本勢助と芥川龍之介」、『パピルス』14、１９８５、立教女学院短期大学図書館。財団法人宮本記念財団H.P.に転載。
渡辺匡一「（Ｖ享受・研究・創作）５明治・大正期（一九二〇年代まで）」、小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』、２００３、世界思想社刊。
渡辺麻里子「（Ｖ享受・研究・創作）４近世」、小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』、２００３、世界思想社刊。

（広島大学）